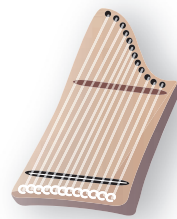


連載 ヘルマンハープ物語 第3章

日本ヘルマンハープ振興会会長・ヘルマンハープ奏者

梶原千沙都^{ちさと}さん(54)

ヘルマンハープ発祥の物語を伝える

ドイツでヘルマン・フェーさんが障害のある子どものために開発した、バリアフリーの楽器「ヘルマンハープ」。梶原千沙都さんは夫の転勤でウィーンに住んでいた2003年にヘルマンハープと出会い、障害者と健常者が共に奏でる美しい演奏を前に、「自分が求めているものはこれだ」と、直感した。子どもを思う親の愛から生まれたヘルマンハープを日本へ、その一心で動いた。

(文 赤坂志乃／写真 前川とも子)

Text by Shino AKASAKA

Photo by Tomoko MAEKAWA

事業計画をプレゼン

事業として成り立たなければ、「音楽のバリアフリー」はただの夢で終わってしまう。梶原さんは、ウィーンの知的障害者施設でヘルマンハープの教授法を研修するかたわら、カフェにこもってドイツ語で事業計画の策定を始めた。大切な楽器をまかせてもらうために、日本でどのように普及しようと考えているのか、きちんとプレゼンテーションをして判定してもらおうと考えたのだ。

帰国してヘルマンハープを普及するには、商標権の登録をはじめ、日本の気候や好みに合った商品開発、ドイツから日本への輸送方法、価格の設定など考えなければならぬことが山ほどあった。

「普通の主婦だったのでわからないことだらけ」。それでも持ち前のバイタリティーでウィーンのジェットロに問い合わせたり、日本の楽器業者に価格の探りを入れたり、運送会社に相見積もりを頼んだり。帰国までの半年間にできることはすべてやろうと前へ進んだ。

2004年3月に世界的に有名な国際貿易コンサルタントのハット・ブレンナー氏の立ち会いのもと、ヘルマンハープ事業計画を発表。フェーさん家族の了承を得て、日本の販売総代理店としてヘ



福祉と音楽をつなぐヘルマンハープを日本に普及し、奏者としても活躍する梶原さん（福岡・あいれふホールで）

ルマンハープを一任されることが決まった。

「幸運だったのは、フェーさんが家族経営のおおらかさで事業をまかせてくれたこと」。小さな村で農場を経営しながらハープを手作りしていたフェーさんにとっても大きな決断だったに違いない。

ドイツの楽曲を日本へ

もう一つ梶原さんが力を注いだのが、ヘルマンハープで弾くドイツ曲集の編纂だった。以前、住んでいたドイツで、子育てをしながら公式合唱団で歌い、子どもと一緒にドイツ唱歌にも親しんでいた。

「ドイツには日本で知られていない美しい曲がたくさんあります。ヘルマンハープと出合った時、この楽器があればドイツの音楽を日本に紹介できるとうれしかった。ヘルマンハープは何を弾くために生まれてきたのか。楽器のルーツを

知るためにもドイツの楽曲を演奏することとはとても大切なんです」

知的障害者施設で音楽療法士をしているトラウデ・ワグナーさんの家に通って、ヘルマンハープの楽曲と一緒に弾いて解説してもらい、約300曲の中から日本人に合いそうな曲を選曲。耳で覚えられるようにハープ演奏を録音し、楽譜を整えた。その時編纂したドイツコレクションはいま、日本で教材として使い、日独の音楽交流はヘルマンハープ事業の柱になっている。

「楽器の原点に立ち返る」

忙しいスケジュールを縫って、梶原さんは時間があればフェーさんの話を聞きにドイツに向かった。

「人間は文明の発達とともに、楽器を演奏の難しいものに進化させてきた。ヘルマンハープは、その時間の軸をさかのぼり、誰でも弾くことのできた楽器に立

ち返るという考え方で開発したのだと、フェーさんは教えてくれました。音楽を奏でる喜びは能力のある人だけのものだろうか。それは音楽が好きなダウン症の息子アンドレアスさんを思うフェーさんの切実な問いかけだったと思います」

梶原さんはフェーさんから日本での事業を託された時、一つだけ言われたことがある。「日本のダウン症の組織と連携を取りながら普及してほしい」と。

「ヘルマンさんの言葉は、ダウン症の人だけでなく、ヘルマンハープを必要としているハンディキャップのある人にきちんと伝えていってほしいという意味だと感じました」

ヘルマンハープ発祥の物語を伝える。そして必ず一流の楽器に育てる。そうフェーさんに誓い、大切な子どもを預かるような思いで、梶原さんは10年近く暮らしたヨーロッパを後にした。

(続く)

日本ヘルマンハープ振興会

検索

コラム

子どもの背中③ Text by Mariko KATO (アナウンサー 加藤万里子)

寒いニュースはもう御免だ。私もダウン症のある一人息子も真夏に生まれ、熱いハートで、のんびり生きている。が、心は早くも、この夏、全国ロードショーの映画に奪われている。題名は『ひつじのショーン〜バック・トゥ・ザ・ホーム』毎週土曜日午前9時から、NHK-Eテレで放送しているアニメの待望の映画化だ。英国を代表するアニメ・スタジオ「アードマン」が、粘土の人形をコマーコマ撮影する手法

で制作、世界中に熱狂的なファンがいるそうだ。これまでに4度アカデミー賞を受賞。日本アニメの神様・宮崎駿監督も絶賛だ。

私たち親子が心奪われるポイントは、2つ。登場するキャラクターは皆、何語をしゃべっているかわからないのに、意思疎通が可能である点。そして、全員がどこか「まぬけ」である点である。特にたった一匹の赤ちゃん羊が、何かとトラブルの原因なのだが、

大家族である群れの仲間も牧場主も忠犬も、それなりに支え合って、理不尽な出来事を乗り越えていく。アニメは一話7分と短いが、何度も我が子は大爆笑している。

笑うツボが分かるということは、ダウン症のある子は「バカじゃない」という証拠だ。どの子が生まれて良くて、どの子は生まれてはいけないのか？よく考えてみて欲しい。このアニメは合理的配慮を考える手引きだと思う。



笑う門には福来る

2015年に想う

福祉こそ「爆発」だ

末年が明けた。新約聖書では、私たち人間は迷える子羊 (Stray sheep) と形容される。でも、彷徨^{さまよ}ってばかりはいられない。しっかりと1年の計を立て、覚悟を決めたい。バッハ (Bach=1685 - 1750) の楽曲「羊は柔らかに (安らかに) 草をはみ」の旋律のように、穏やかで心休まる年となることを願う。

さて、元日の夜、ウィーン楽友協会の黄金のホールから衛星中継されたニューイヤー・コンサート (現地は1日昼) を、テレビライブで楽しんだみなさんも多かったのではないかな。

今年のマエストロは、インド出身のズービン・メータ (78) =写真。シュトラウス一家のワルツ、ポルカなどの楽曲を華やかに軽やかに指揮し、世界80か国4億人にウィーン・フィルの至極の調べを届けた。



毎年、用意される見せ場。2015年は、ヨハン・シュトラウス2世の「爆発ポルカ」の演奏が舞台となった。マエストロが一瞬、何かを操作した。すると、ドカーン…。

くけたたましい破裂音とともに、すごい紙吹雪が…。新年の祝い酒でまどろんでいた私も、腰を抜かしそうになった…>

こんな感想が、爆発シーンの直後からネット上でつぶやかれた。テレビの解説は、こう伝えた。「爆発という言葉は、当時、クール、カッコいい、という意味で使われていました」。

芸術は爆発だ、と言ったのは岡本太郎 (1911 - 1996) だった。その岡本の「爆発」とは趣を異にするだろうが、「福祉も爆発だ」と思えてくる。いや、爆発ポルカの文脈 (爆発 = クール、カッコいい) で言えば、「福祉こそ爆発」かもしれない。対人支援の仕事は、常に命と向き合っている。知も情も力も必要な、クールさを要求される仕事なのだから。

昨年11月、福島県郡山市で開かれた全国社会福祉法人経営者大会。会場の「ビッグパレットふくしま」には、津々浦々から約1200人の法人経営者らが集った。

採択された大会宣言の冒頭には、次のような文章がある。

<社会事業家と呼ばれる私たちの先達は、支援を必要とする人々のために私財を投じ、今日の社会福祉法人制度の礎を築いてきました…しかし、近年いわゆる内部留保問題を発端に、一部の社会福祉法人による不適切な事案を取り上げた偏りのある新聞報道等により、国民が社会福祉法人に向ける視線は極めて厳しいものとなっています…私たち自身が率先して改革を行わなければ、社会福祉法人制度は社会の信頼を失い、その未来をも断ち切れかねません…>

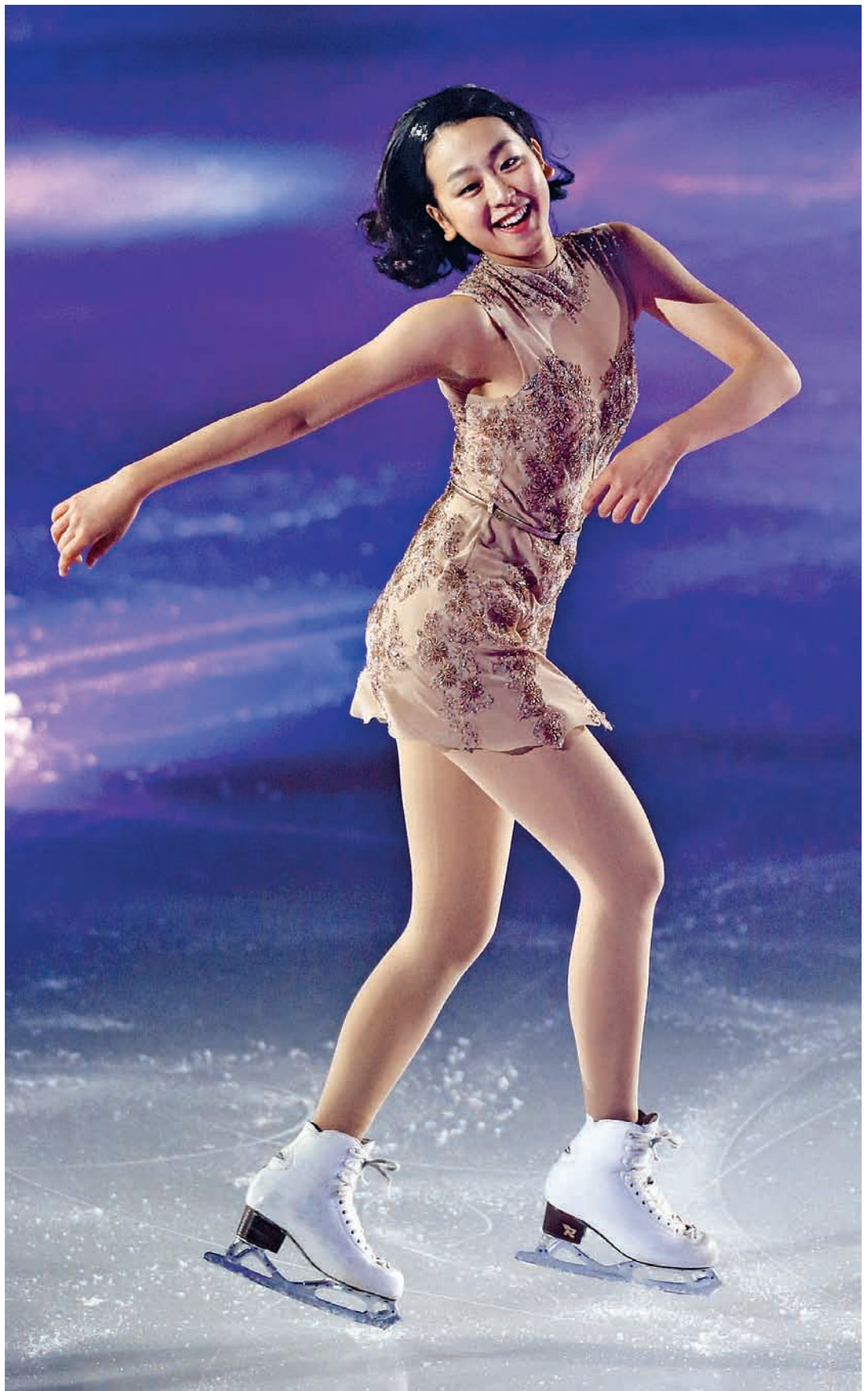
「偏りのある新聞報道等により…」と、かなり、踏み込んだ表現に。そして、危機感をきわめて率直に露わにしている。

渚の風の創刊号 (2014年7月14日) で、私たちは編集の方針について次のように書いた。

<報道の神髄は「大切にすべきものは何か」を常に考えることです…一部の報道姿勢は「等身大の福祉」をゆがめているだけ、と思えてなりません。「暗」や「悪」を報道するだけでは、社会正義は達成できません。「明」や「善」も報道の素材であるべきだし、それこそが福祉の本質だと考えます…>

もし、福祉の仕事に負のイメージだけを抱く人がいたら…。そんな人こそ、巨匠、ズービン・メータの「ドカーン」に覚醒されるべきだ。

渚の風編集長 平田鷲州^{あつくに}



早春Photo

初滑り「充実の1年に」

氷上の妖精、浅田真央さん (23)。1月10日、大阪なみはやドーム (門真市) で行われたアイスショーで初滑りを披露。「充実した1年にしたい」と新年の抱負を語った (撮影 鳥越瑞絵)

4面

社会福祉法人への課税は見送り

社会福祉法人への「強い嵐」が吹く中、閣議決定は「課税見送り」となった。全国社会福祉法人経営者協議会の会長、高岡國士さんは「今後」を見据えた。



5面

「イスラム国」テロ、日本人を人質に

誰もが「72時間」を気に留めた。そして新たな展開は「期限なし」の交渉に。安倍晋三首相は「許しがたい暴挙。テロには屈しない」と、陣頭指揮を続ける。

